
刀語 ～万能者～

昌幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀語 ～万能者～

【Nコード】

N4230X

【作者名】

昌幸

【あらすじ】

もしも、刀語の七花と七実にもう一人の

兄弟がいたとしたら？

もしも、七実より先に見捨てられ、捨て子になり、

否定姫に拾われていたとしたら？

もしも、俗に言う敵キャラ（真庭、鏑、否定姫）と

仲がよく、それらのキャラからいろいろ学びとって

七実とどうレベルの強者だったとしたら？

というifを重ねた小説です

アドバイス、ジャンジャン受け付けます！

優秀な先輩方、作品をよりよくするためのお力添えをお願いします
あと、“オリジナルの変体刀を募集したいと思います”

希望としては、金偏であることが望ましいです。

名前、効果、使い方、形、何に主軸を置いたか記入のうえ感想欄に
書いてください

プロローグのプロローグ（前書き）

昔々の大平の時代。

戦国時代の覇者が治める時代のお話

でも、江戸ではない

家鳴家が治める尾張幕府。

一風変わった物語の、一風変わった物語。

はーじまーるよー

プロローグのプロローグ

side???)

「ああ、可哀想。楽に死ぬこともできないなんて。」

今、俺たち二人の目の前には

病弱でいつも死と隣り合わせで、現に今も病魔に侵されている七実と

「いや、こっちをどうするかが問題だ。」

心配そうに一つ上の姉の顔を見ながら看病している七葉がいる。

正真正銘俺たちの長女と長男が。

「たった三歳で、素手で木を裂けるほどの力量をみせているこいつの面倒は

正直に言って俺には無理だ。」

「あら、自分の子に言うセリフがそれかしら？」

そんなことくらいは俺にもわかってるつもりだ。

それでも!!!!

「やはり、こいつは今のうちに殺しておかねばなるまい!...。」

「あらあら? 自分の息子にいつか自分が負けるのをおそれているの?」

「そんなことはない…本当は、家族揃って過ごしたいと思っているが…。」

「じゃあ、捨ててこればいいんじゃないの？」

誰にも拾われず、死んだのならそこでおしまい。あなたの望みも成就できて万々歳。

もし誰かに拾われたとしたら、それはそれでいいじゃない。

自立できる年までその拾った人に任せておいて、自立できたら迎えに行つて家族みんな揃って過ごす。それで、どう？」

「……それしかないのか？」

「ええ。おそらくは」

「…仕方あるまい。私が捨てに行こう」

何もわからないという顔でこちらを見る息子を見ながら言う

「では、いつてくる」

――・――・――・――・――・――・――・――・――・

side七葉

お父さんに連れられて“おわり” っていう所の大きい道からちよつとはいったところに来た

「……この辺りでよいか。」

「お父さん、なにいつているの？」

さつきからボソボソいつているよね？何を考えているのかな？

「ああ、七葉はここにいなさい。誰か来るまで動いちゃダメだぞ」

「えー？なんでー？なんかここ、つまんないよー？」

「なんでもだ。じゃあな。我が息子、生きていたらまた会おう」

それだけ言ってお父さんはどこかへ行ってしまった
一人になると、急に怖くなってきちゃった

「うう・・・お父さん、お母さん。怖いよう、助けてよう」

膝を抱えていっぱい泣いた後、僕は疲れたのか寝てしまった

—————
—————

どうも、はじめまして。昌幸といいます

急に刀語を書きたくなってしまうので投稿させていただきます

文才のかけらもない文章ですが、

生温かい目で見てもらえたら幸いです

よろしくおねがします

プロローグ（前書き）

否定姫ご登場です!!

プロローグ

side否定姫

あたしは否定姫。

母様とか爺とかにいつも勉強させられて、勉強するのが嫌だったから逃げてきちゃたのよね
で、どこ行こうか、とか考えながら尾張の街を散歩中。

「あっ！団子ください」

こんな感じでいろいろなお菓子食べてたらなんか子供の声がきこえたの。

「?……行ってみますか」

声のほうに行くと、私と同じくらいか、1つか2つ年下の男の子がいたんだよね

side七葉

起きたら、見覚えのある天井で、昨日のことは、全部夢だった。
っていうことはなく、周りは路地裏らしい木の板と青い空。

「僕、お父さんに置いて行かれちゃった」

口に出していってみると、めちゃくちゃ悲しくなってきた

涙がでてきた

「うっうっ・・・お父さん、お母さん。どこお？さみしいよ・・・」

「何で泣いているの？」

「え？」

声のしたほうに頭をむけたら、七実お姉ちゃんと同じくらいきれいな金色の髪の毛と蒼い目をしたおねえちゃんがいたんだ

（side否定姫）

「何で泣いているの？」

男の子が泣いていたから思わず声をかけちゃった
でもこの子、見れば見るほどかっこいいわね
なんか、某妖怪漫画の某クオーターの覚醒時みたい。黒だけど

「うっうっ・・・お父さんにおいていかれちゃった。」

ああ、予想通りの回答ね。やっぱり捨て子みたい

「じゃあ、私と来る？」

あれ？思ってもみない言葉が、私自身のくちからでちゃったわ？

「え・・・？いいの？」

あらま、この子も乗り気みたいだわ。
ま、言っちゃったものはしょうがないわね

「いいわよ？で、くるの？こないの？」

side七葉

「じゃあ、私と来る？」

そう聞かれた時、お姉ちゃんが輝いてるみたいに見えた。
それで、ついていってみたいって思った

「え・・・？いいの？」

口から勝手に言葉が出てきた
でもたぶんダメって言われるんだよね
ぼくどうしようかな？どうやっていきっていくのかな？

「いいわよ？で、くるの？こないの？」

めちゃくちゃうれしかった
本気でついていきたいって思った

「うん！ありがとう！お姉ちゃん！」

「お姉ちゃんはいいいから、好きなように呼びなさい。じゃあ行くわよ」

ぼくは、まだ先の未来で弟の敵になる人の従者になった

プロローグ（後書き）

どうも、昌幸です

否定姫との出会いを書かせていただきました

今回書いていて思ったこと。

『子供の言葉はとても難しい』です

次の次ぐらいで原作入りまーす

1の巻(前書き)

1の巻

side七葉

「さあついたわよ。ここが私の家。」

「うわぁーおおきいうち!!」

ほんとおおきい。町の人たちの家とかわらないくらいの質素さだが、普通の家の3倍はある

「そう?そんなに大きいとは思わないけれど」

もしかしたら、お姉ちゃんはお姫様なのかもしれない。いや、きっとそうなのだろう

「ねえ、こんな大きくてきれいなうちに僕がはいっていいの?邪魔にならない?」

これが問題だ。住むおうちが見つかるのはいいけど、迷惑はかけたくない

「大丈夫よ。私の付き人が一人増えたくらいで誰も気にしやしないわ。」

ああ、そういえばここに来るまで何も聞いてないけれど、あなたの名前は?」

あ!忘れてたよ自己紹介

「僕の名前は鑓やすり 七葉しちはだよ。よろしくね、お姉ちゃん」

「ふーん。私は否定姫。これからよろしくね、七葉。」

否定姫？どういう意味だろう？

「うん！よろしくね、お姉ちゃん」

side 否定姫

「ただいま」

ああ、帰りたくもない、めんどくさい家に帰ってきてしまった

ドタドタドタ・・・

「姫様／姫！！！」

帰りたくもない家のめんどくさい使用人たちたちだ

「姫様！！どこへ行っていらっしゃったのですか！！この爺、あれほどおそとにではならないと……………」

いつも口うるさい爺だ。たまには私の自由時間をくれてもいいじゃない

「ああ、ごめんね。尾張の街歩いて、子どもを一人連れてきた。この子、私の従者にするから」

「鑪 七葉です。よろしく願いします」

ふふっみんなあいた口がふさがらない状態だ。いい気味だわ

「なにをいっておられますか、姫様！このような下賤なものを我々の内へ入れるなど!!」

「ああ、異論は認めないし追い出すことも許さない。さあいくわよ、七葉」

「うん。お姉ちゃん」

いやあ。サプライズってのはやっぱり面白いわね

部屋でゆっくりしてたら、七葉が急に

「どうすれば強くなれるかな？お姉ちゃんを守れるくらいに」

って言いだした

「うーん・・・体を鍛えることから始めたらどう？」

そう言ってみた。理由？面白そうだったからに決まっているじゃない

「わかった！がんばるね！」

そう答えて七葉は部屋の隅っこで腕立て伏せを始めた

……………は？……………え！？

ちよっっ！！スピード出しすぎじゃない！？もう500超えそうよ！？

まだ2分たってないのに？

「ちよっ！！ちよっとストップ！」

「？何？お姉ちゃん」

うわー！ー！

まだ汗一つかいてないじゃない。

「い、いや、すごいなーと思って」

「ありがとお姉ちゃん。僕、がんばって体、鍛えるから！」

そう言い残して腕立て伏せを再開する七葉。
私ってすごい子をひろってきちゃったかも。

（side七葉）

否定姫？様に拾われてから僕は必死に体を鍛えた。

“何事にも体が一番だ。”

って小さい（って言ってもまだ生まれて4年しかたっていないけど）
時から

お父さんに言われてたし、姫にも言われてたしね

ああ、姫って呼ぶのは一応従者だから。公の場ではそういう風に呼んでいる

で、1年間体を鍛えることに1日のほとんどを身体の強化に費やした言葉づかいはお姉ちゃんが、そうしたほうが迫力が出るって言うってたから直したんだ

「はあ！」

ドスッ	ウッ
バキッ	グハッ
ドカン	ギャー

こういうふうには、大きい大人たちが30人一斉に襲いかかってきても、余裕で倒せるようになった

周りからは『天才』、『神童』とか呼ばれるようになった
なんでそんなことを言うのかわからないけれど。

「こんなの、練習したら誰でもできるじゃないか」

「そうね、でもアンタは素手でその強さなんだからまだまだ強くなれると思うけど」

「そうなんだけどね、お姉ちゃん。僕、なぜか剣が持てないんだよね」

そうなのだ。今の僕の最大の課題は剣が持てないこと
剣を持つとそこらの子どもにも勝てなくなる

「そうねえ．．．<やっぱり『鑓』だからかしら？>ボソッ」

「どうしたらいいと思う？お姉ちゃん」

僕はこれを直したいと思っているが、お姉ちゃんはそういういつも
も渋る

「うーん．．．．．ああ！！そうだ。確か“真庭忍軍”っ
て言う忍の里に
身体を改造する忍術があったはずだわ！！」

「真庭忍軍？長いからまにわにでいいや。そんな忍法があるのか？
そいつらにたのべばこのめんどくさい体質が直せるのか？」

じゃあそいつらからさっさと学びとってやる！

「たぶんね。じゃあ、依頼してみますか。右衛門左衛門。」

「はっ」シュツ

「真庭忍軍の頭領をひとり、連れてきてくれる？依頼したいから」

「ことわらず不断。承知しました。では」

ああ、こいつは右衛門左衛門。道でバツタリ逝ってたから連れてきて、お姉ちゃんの従者にした。

side 三人称

「来たぞ。なんかようか？ きゃはきゃは。俺は真庭蝙蝠。よろしくな」

「やっときたわ。あんたにはこの子を真庭の里に連れて行って鍛えてほしいのよね。ざっと12年くらい」

「鑪 七葉です」

「は？ ダメダメ。俺らは暗殺の依頼しか受けねーの。なんでこんなよわっちいガキを鍛えなきゃいけないのよ。」

「弱っちい？ これでも？ 七葉、あの木を折ってみなさい。」

「うん！・・・はあ！！！」

バキッ

ミシミシ…………ドオン

「おうおう、こりやすげえなあ」

「頼むわ。蝙蝠さん？ あの子、剣が持てない、使えないって言うのが悩みなのよ」

「ほう？ で、俺が使える忍法“骨肉細工”を学ばせてやりたいというわけか？ きゃはきゃは、いいぜ。真庭の里に直接連れて行って鍛えてやろうじゃねえか。まあ、ほかの奴らは俺が説得しといてやるよ」

「ほんと？ありがと。12年くらいしたら任期は終わり。ここへ送
ってくればOKよ
じゃ、よろしくね」

僕は未来で弟の敵になる人に技を習うことになった

1の巻（後書き）

なんかもう、すごいですね
三点リーダーの数が。

今回の教訓は『僕が書いたら、カッコと三点リーダーが多くなる』です！

原作には遠い

2の巻

「真庭の里へ行くための準備、手伝っていただきありがとうございます」

「いいっていいって。きやはきやは。俺なんて骨肉細工できるようなった後は

なりすます予定の奴の服装を調べて、その服を用意して体の中に手裏剣を入れるだけだから、

こんなことをする必要がなかったから久し振りでなんか楽しいしよ」

「なあ、ひとつ聞いていいかな？蝙蝠どの？」

「ん？質問か？きやはきやは、いいぜ、答えてやるよ」

＼side七葉＼

「では…、なぜ真庭忍軍は殺しを生業とするのですか？この世の中、暗殺だけじゃ生きていけない。

現に今、あなたの里は金銭不足が著しく、ままならない状況だと聞き及んでおりますが。」

そう、そこが疑問なのだ。忍者なのだから情報収集や、監視、さらには護衛など、

できることは幅広くあるのだ。金銭が不足して困るくらいならそういう仕事もやればいいのに

七葉は否定姫からまにわについて、説明を受けた時からずっと疑

問だったのだ。

「あゝ、そりゃあれだな、性格の問題。俺たちの中には里のモン以外との接触を断ちたがるヤツもいるし、無益な殺生をとっても好む奴もいる。……まあ、適性の問題だと思うんだわ。」

あゝ。何となく理解した。こんな派手な忍び装束を着て、全く忍ぶつもりがない

……まあ、いわゆる変人たちの集まりだ。そういうこともあるのだろう

「そういうことですか。わかりました。ありがとうございます」

「つていうかさ俺、さっきからずっと思ってるんだけど、

お前ってあの外国人みたいな金髪の………なんだっけ？……ああ、思い出した。

否定姫？様の前にいる時と俺みたいな他人という時と、

性格変わりすぎじゃね？忒重人格か？」

「ああ、この喋り方ですか？一種の社交辞令だと思ってください。公の場で姫の前にいる時のようなあの感じでしゃべっていますよねかこう……

絡まれたりされたり、カツアゲとかいうものをされそうになったり、遠くのほうから赤ちゃん降ってきたりで大変なんですよ」

そう、ほんとに大変なのだ。なんか、前はどっかの殺人現場に行っちゃったりして大変なのだ。

「そっそうか……最後のは意味がわからなかったが、とりあえず、ほとんどの大人になめられて大変だと。だからわざとこんな言葉づか

いをして相手にみくびられないようにしてるってか？」

「そうですね。」

でもまあ、絡まれたりされたときには殴って地面に埋めてみたり蹴って雲まで上昇させてあげたりしてますけどね」

「ひえー！おっかないことで。ってかさ、そんなに強いのなら俺ら必要なくね？」

蝙蝠が言っていることも分からなくはない

だけとお父さんの虚刀流を使えない上に剣も使えないのは大きなアドバンテージだ。

これを克服するするためには、通常努力だけでは足りないのだ。

「そんなことはありません。僕には剣が使えないのです。」

この弱点をなくすためにはそれこそ忍法でもなんでもすがるしかないですよ。」

「きやはきやは。そういうもんなのか？っていうか刀がまるつきり使えないってマジか？

あんまり信じらんないんだけど。」

「ええ。マジですよ。振りかぶると後ろに落ちるし、前に振ると取りこぼします。」

だから僕はあなたが羨ましい。体中の筋繊維が思うように変えられるなんて

今の僕からしてみれば本当にうらやましい」

本当は僕も虚刀流を学んでみたかったし、七実お姉ちゃんとかまだしゃべれない七花と

試合でもしてみたかったのだがしかたない

はあ…………なぜ僕は捨てられたのだろうか…………

「きやはきやは。おーい、とりあえずこっちは終わったぜ…っておいおい、なんでそんな

辛気臭い顔してんだ？悩み事か？」

「いや、なんでもありません。こっちも終わったところですよ。手伝っていただき、本当にありがとうございました。」

「きやはきやは、いいっていいって。それよりさ、敬語やめてくれない？

しゃべりにくいから。」

「ああわかった。こんな感じでいいか？」

「きやはきやは。そんな感じでしたのむわ。

じゃあ準備もできたことだ、里へ移動しようじゃねえか」

「そうだな。これからよろしくな、先生。」

僕は未来で弟の敵になる人と仲良くなった

2の巻（後書き）

なんかもうヤバイですね。
詰め字が。

今回の僕の教訓は、『間はちゃんとあけないとマズイ』です！
原作へたどりつくのは何か月後のことか

3の巻

side否定姫

「入るよ、お姉ちゃん」

その声が聞こえた時、私の体は『ビクッ』って音がするほどに反応した。

これから言われることはわかっている。

というか、わかりきっている
なのになぜ？

………いや、わかりきっているからこそ、なのだろう
しかし、私は送り出さなければいけない。だから。

「どうぞ。」

答えた。

「なんのようかしら？七葉。」

知らない振りをする

「旅の準備が終わったから、そろそろ出発しようかと思って。挨拶
にきたんだ」

「……そう、できたのね。いってらっしゃい。」

この言葉を口から追い出すのに苦労した。
情けない。真庭の里に修行に行かせるようにしたのは私なのに。

「行ってくる。

帰ってくる頃には、お姉ちゃんを誰も傷つけられないくらい強くな
って帰ってくるから。」

「〔ハッ〕……さっさと行きなさい。

見てなさいよ。あんたが返ってくる頃には、誰にも負けないくらい
賢くなって幕府の一角に入ってやるんだから。」

七葉が出ていく。

この一年のことが反芻される。

思えばずっとそうだった。七葉に鍛えるように指示したのは私。

あの時から彼は、ずっと修行して、鍛練を重ねて、メキメキ力をつ
けていった

そう、だったの。あの子は私のために力をつけて、
私を守るために強くなろうとしてくれていたの。

……うん。

決心はついた。

七葉が武の道を究めようとするのなら

私は文の道を極めてやろうじゃないですか

私と七葉、それに右衛門左衛門が力を尽くせば

ご先祖様の時代からの私たち一族の夢、叶えられるかもしれない。

そうと決まればすることは一つね。

「……右衛門左衛門？ いるんでしょ？ アンタ、ちょっと日本中駆

け回って

情報集めてきてくれない？私が幕府入りするときのために。」

（side 右衛門 左衛門）

「御意。北は蝦夷、南は九州が薩摩まで、すべての情報を集めて見せましょう」

私は七葉殿が入ってきたあたりから天井裏に潜んでいた話を聞いていると、

姫様は、始め、何か悩んでいらっしやるようであった。

まるで、七葉殿が真庭の里へ技を磨きに行かれるのが悲しいようであった。

だがそれは、仕方のないこと。姫様も分かっていたようで、すぐにあきらめられたようだ。

それで終わりとおもっていたのだが姫様の様子が七葉殿の一言で変わった。

『お姉ちゃんを誰にも傷つけられないくらい強くなってかえってくるから。』

文字通り変わったのだ。

姫様が何かを決意したような顔つきになったのだ

まあ、姫様が元気になられたのならそれでよいのだが。

私はただ、命じられた任務を遂行するだけだ

side七葉

「おい、七葉。あんな別れでいいのか？
今から12年は会うことができなくなるんだぞ。」

「あんなって……見てたのかよ。」

「ん？見てたぞ？で、あれでほんとにいいのか？」

「何言ってるんだ？あれが最高の別れ方だよ。」

「うん？そうなのか？そうなら別にいいがよ」

そう、あれが最高の別れ方なのだ。

お姉ちゃんに会った時からの約束を再確認できたのだから。

「ああ、そういえば蝙蝠。お前らの里までどうやっていくのだ？」

ま、大体想像はつくが。

「ああ。当然、走っていくぞ。」

うんうん。俺という荷物があるのだから当然馬で行くのだろう……
……って、

「嘘ーーーーー！？いや、無理無理、俺ってあんまり体力ないんだぞ？」

「大丈夫大丈夫。ちょっとスピードは落とすから。んじゃ、いくぜ。」

「うわっ!! ちょ!! 待てーーー!!」

僕は未来で弟の敵になる人にいじめを受けた……

3の巻（後書き）

3の巻終了です。

今回書いたのは、次への繋ぎ？かな

次は真庭の人々との絡み？です

っていうか、まだ零話にも行っていないってどういうこと！？

まあ、がんばります

4の巻

森の中で二つの音がこだまする

シュタツ、シュタツ、シュタツ……

かたや乱れがなく、注意しないと聞こえないくらいの足音。

トトト、トト、トトトトト……

かたや、大きく、乱れていて、周りに響き渡るような足音。

全然違う足音で共通しているところと言えば、
二つの足音が向かっている先。くらいか

「おい、ほんとに…はぁ。こっちで…ヒィ。合ってるのか？蝙蝠。」

「合ってるよ。後、一刻（約30分）ぐらいで着くはずだ」

「えー？まだそんなに走るのかよおー、、、いいよな、蝙蝠は木の上走れて。」

「ん？里に着いたら、これも教えてやるよ。

っていうかさ、一時（約2時間）も走り続けられる七葉の体力のほ
うがすごいと思うぞ。

なんたって、俺たちはこういうことを専門にしているから、出来て当
たり前。なんだよ。きゃはきゃは」

「よし、後一刻だな。それくらいなら本気で走れる。サッサと終わ
らす！……ハッ！！」

ビュン！

七葉のスピードが段違いに速くなる

「きやはきやは。俺はその速さだけで十分だと思うんだけどなあ…」
後には忍者の呆れ声が残るのみ。

〓尾張・後の否定屋敷にて〓

＼side否定姫＼

「……………右衛門左衛門、もう一回行ってみなさい」

少し焦った声が無人の“部屋”に響く。

「はい。奥州の顔役、飛騨鷹比等からの
“家鳴幕府に謀反を企てているので、それに合わせて日本各地でも
兵を挙げてほしい”
という檄文が

家鳴幕府にあまり協力的でない大名から各地に散らばる剣豪、拳豪
に巻かれているそうです」

部屋。ではなく天井裏から返答がされる。

ただ、その内容は、あまりにも衝撃的であった。

「そう。…………あの飛騨鷹比等がねえ。家の者の安全のために幕府
に従っているあの男が…………。」

七葉を修行に出させておいてよかったかもしれないわね。

右衛門左衛門、もっと情報を集めて頂戴。確固たる証拠を挙げてから上に報告するわ。

……まあ、その頃にはもう始まっちゃっているかもしれないけれど。」

それを利用して、幕府内へ入り込むわ。

そうでもしないと、私の代で終わらないからね

「御意に。」

天井裏から右衛門左衛門の気配が消える

「ま、やってみますか。」

私以外の生物がいない部屋にひとりごとが響く

Ⅱ真庭の里・入口Ⅱ

〈side七葉〉

「ぜえ、はあ。ぜえ、はあ。やっと着いた、か？」

バタッ

最後の加速で体力を使い果たして、地面に倒れこむ

「ああ、疲れた。……もうここと尾張を往復するだけで体力ものすごく付くんじゃないのか？」

……さすがにそれは勘弁、だけど。」

倒れたまま真庭の里の中を見ていると蝙蝠によく似た格好の緑の服を着た人が見えてきた
なんか、こちらへ近づいてくるようだ

「…………一応、臨戦態勢は取っておいたほうがいいよなあ。」

念のために飛び上がって戦闘の構えをとる
が、準備むなしく（いや、何もないほうがいいのだが）近づいてきた青年は話しかけてきた

「お前、何もんだ？ここの里は12頭領の案内がなけりや辿りつけないような
地理的条件の場所に建っているはずだが。」

あ、一応警戒はされているらしいので、自分のことを名乗る

「僕、鑢 七葉と言います。真庭蝙蝠さんに案内されて途中まで来たんですけど、
ペースを上げて全力で走ってきたら蝙蝠さんより先に着いてしまった次第です。」

これで疑われはするけれども、敵対は一応されないだろう

「そうだったのか？…じゃあ、この里に来た理由は？
依頼なら蝙蝠を通してくれたらよいのだから、そんなことではないだろう？

それから、敬語とかいらなからな。普通にしゃべれ。」

「それじゃあ、ここに来た目的は、修行するため。

“俺は刀が使えないからその体質を直したい” って蝙蝠に言ったら、

里で修業すればいいってことになった。これでいいか？」

うーん、まにわにとって軽いよな。

初対面でいきなり敬語とかはいらない。だからな

「ふーん。見たところ体は鍛えてあるけど。それじゃ、だめなのか？」

「だめだな。一流じゃなくてもいいから、せめて刀を扱えるくらいにはなっておきたいな」

それは、結構なデイスアドバンテージになるからな

「よし！わかった。俺からは刀のことは教えられないけれど、拳法を教えてやろう！

俺の名前は真庭 蝶々《まにわ てふてふ》だ。よろしくな」

拳法か……習えるものは全部習って損はないな

「よろしく！」

ところで蝶々、真庭って動物の名前を取っていつているのか？」

ここは気になるところだ。

「ああ。12頭領はみんな自分の忍法の特長を動物にあてはめて名乗ってるぜ。

ちなみに俺は、体の重さを消す忍法だから“蝶々” ってわけだ」

「ふうん。じゃああそこに隠れて見てる蝙蝠も同じようなもんか？」
いい加減隠れて見られるのもうざくなってきたからな。ここらでできてもらうぜ

「おう！わかってたのか。そうだぜ、あいつは恐ろしいほどの軟体人間だからな。

蝙蝠、いい加減出てきたらどうだ？そろそろきれるぞ。」

「きやはきやは。怖い怖い、じゃあ七葉。12頭領の2人目との自己紹介が終わったみたいだから、他の頭領の所へ行くぞ。」

「はいはい。名に出てきていきなり仕切ってんだよ…まあいいが。」

俺は、弟の敵になる人と、ため口をきけるような仲になった

4の巻（後書き）

真庭の頭領たちの中で

誰と仲良くさせるべきか、正直悩みましたが
やっと決まったため、投稿します

後、2，3人と仲良くさせようかなって考えてます

本編ですが、七葉の年齢がぼわからなくなってきていますね
（実はまだ4，5歳）

その辺、想像で、まかなくてください！！
お願いします！！！！

5の巻

side七葉

「なあ、蝙蝠。」

「ん？なんだ？」

「ひとつ聞きたいんだけど、真庭の頭領ってなんで12人もいるんだ？」

頭領っていうと、普通一人じゃない？っていうか数が多すぎて、混乱するとおもうんだが」

真庭はつくづく変だと思う。

忍び装束のくせに全然忍んでないし、

普通の忍者が得意であるはずの潜入が性格的に無理、って言うだけの理由で貴重な収入源を減らしていたり、
頭領が12人もいるし。

とにかく、普通では考えられないことばかりだ。

「……うーん。詳しいことは俺にもわかんね。こういうのは蝶々に聞いてくれや。」

っていうことで、蝶々パス。」

「蝙蝠……はあ、人に自分が分からないことを押しつけんじゃねえよ。」

それ以前にお前ちゃんと真庭忍軍の歴史ぐらい覚えておけよ。頭領

だろ？」

「まあ、いいじゃねえか。

俺は思うんだけど、相手に知られてまずいような…例えば真庭の頭領の技とか、弱みとか

そんなもんにつながる情報を持っていて、敵に渡してしまうようなヘマをやらかしちゃうくらいなら、

もとからそんな情報を持ってないほうが有益だと思うんだ。きやはきやは」

「蝙蝠、それは屁理屈だと思うぞ」

真庭の頭領の残りの10人が全員こんな個性的なメンバーだったら俺、ここで修業する気なくすかもしれねえ

後の全員が蝶々みたいな常識人であることを願うのみだ

「あ、それもそうか。そういうことなら知らなくてもいいんじゃないかないか？」

フイ!!!

蝶々はある程度の常識を持つ普通の人物だと思っていた俺がバカだったのか!!!!???

「ま、それはそうとして、何で頭領が12人もいるんだ? ってことだったな。

うろ覚えでしかないような知識でよければ、俺が答えてやろう。

昔、っていつても150年ほど前だが、真庭忍軍にいた頭領は、1人だけだった。

だけど、真庭に来る依頼は多いうえに種類も“潜入”“情報収集”
“暗殺”などとても豊富だったそうだ

当時の真庭忍軍はまだできたてで、忍びの数が今の十分の一しかいなかったそうだ

当然それ相応の数をこなしていた忍びたちは疲弊し、殉職していく
そんな里の現状を仲間思いだった当時の頭領は、下忍以下の忍び見
習いともいえる

まだ若い忍者たちが任務を受けることを禁止した。

ただでさえ猫の手も借りたいほどに忙しかった里の状態は案の定最
悪ともいえるほどに大変だったらしい

そこで、里の上忍以上の奴らで、頭領には及ばなくても並の任務で
は傷一つ、どころか汗一つかかないような優れた忍びを選出し、頭
領である自分と同じ地位である頭領の代理を11人に任せた。

……これが真庭名物“12頭領”の起源だ

さらにここで忍び装束がなんでこんなにおかしいか。

これの説明ができるが……まあ、省いていいだろう。なにしろ
最大の理由が頭領としてわかりやすい恰好でいたほうがよいだろう
っていうことだからな」

「ヲイ!!!??」

ここは言ってもよかっただろう。ようするにあれか？初代頭領たち
は“自分が頭領”ってアピールがしたいがためにこの恰好をしたた

っていう訳か？かんっぜんな私利私欲じゃねえか！！！！

部下を守りたいっていうその初代頭領の発想はすごいと思うがな

っていうか、この話を話しているときの蝶々の顔が微妙に誇らしげだったのはナゼカナ……？

嗚呼…生まれてから初めてだったかもしれない常識人の像が崩れ去っていく…

「それから続きなんだが……」

「蝶々、そのくらいにしとけ。七葉の頭が処理に追われていて、ちよっとダメになってるわ。きやはきやは」

蝙蝠がこつちを見て、にやにやしながら蝶々を止めている

チキショウ！！！！蝙蝠め。こうなることをわかって蝶々に説明を任せたな！！

……後で殴っておかないと、何度もやられる気がする。

………ん？

「なあ、あそこにあるなんか一見普通の武家屋敷みたいになってるけど、変な感じのする建造物は何だ？」

「あれが目的地。さっき念話が飛んできたんだが、今日は本当に珍しく12頭領全員が揃ってて、

お前のことを品定めするそうだ。気をつけろよ。もし、誰か一人でも機嫌を損ねると、

今のお前じゃあ瞬殺されちゃうような物騒な奴らばかりだぜ。もちろん俺と蝶々を含めてな。」

「七葉、覚悟はできたか？俺と蝙蝠が先に入るから、中から声が聞こえてきたらお前も来い。」

忍者だからな。以外に戦闘狂とかいるのかな？

「了解。サッサとしてくれよ。待ってんの、嫌いだから。」

「「じゃ。」」

蝙蝠と蝶々が中に入っていた

………体感時間で15分ぐらいか？そろそろこっちから入っていかうか、

と思い始めた時に家内から、聞き覚えのない声が聞こえてきた。

「家の外にいる、われらが里に修行に来たという小僧、入るがいい」

若く、それでいて威厳のある声だ。声の持ち主は相当な強者である、と容易に想像させるような心の奥底から響く声。

その声に導かれ、僕は、修行の第一歩を踏み出したのであった

5の巻（後書き）

七葉がどんどん大人びてきてるけど気にしない！（泣）

つぎの話でやっと12頭領とごたいめーん

今回の反省

『下書きがないと、その都度考えるから、遅いし、キャラの口調なども変わりやすくてめんどくさい。』です！！

おうえんよろしくです

6の巻(前書き)

頭領の登場!!

6の巻

（side鳳凰）

我は真庭鳳凰。暗殺専門忍者集団、真庭忍軍の12人いる頭領の1人だ。

さきほど、蝙蝠からの鳩が来た。

この鳩は、定期的に出させるようにしている。

それはなぜか。

その理由は2つ、いや、3つある。

？尾張の、中央の情報を少しでも多く仕入れておくため？
？どんな依頼が来たか、それを把握するため。

一つ目と二つ目についてはわかるだろう。

情報に疎い組織はすぐに途絶える。海の方こう側では、それは周知のことらしい。

さらに、依頼に適した人材を派遣しないと、効率よく依頼を遂行できないためだ。

さて……三つ目だが、ただ単に私が派遣されている者たちの安否を確かめるためだ。

“忍者なのだから、自分の身は自分で守れるだろう。”

と、聞かれたらうなずくしかないのだが、それでも我は心配なのだ。
……………つまり我は過保護なのだな。

ではなく、本題に入ろうではないか。
この鳩にくくりつけられていた文に、衝撃的なことがかかれてあった。

“否定姫って奴から依頼があつてな、その内容が面白かったから、引き受けた。”

ここまではよい。我も、何も、気にも留めなかった。
問題は式枚目。ここに問題が書かれてあつたのだ。

“今、否定姫が預かつてる七葉って奴を鍛えてほしいって言う内容だ。”

“ってことで、たぶん文が届くころには里につくくらいになつてるとは思うぜ。きやはきやは”

……………なんだと!?

この里の在処は門外不出。既に真庭は、裏の仕事しかこなさず、誰にも里の場所はばれてはいない

その在処を誰ともわからない輩に教える。だと!?

それも、もうすぐ着く。か……。

いや? 考えてみたら、12頭領の一人である蝙蝠の奴が里のことを考えずにそんなことをしてかすわけがない。

つまり、いまからここへ来る七葉、とやらは相当な使い手か、そうなる素質がある者。

……………ふむ。里へ着いて早々に追いつくのも忍びない。

Side七葉

「失礼します……………クッ!?」 ビュン

寸前で腰を落としてかわした俺の髪の毛を掠める様にして長い柄の武器が通り過ぎる。

「ふむ……………反応は上々。反撃の体勢をとらなかったのが減点だな。」

先程、屋敷の中から聞こえた声と同じ声。クソッ殺しに来てたぞ!? コイツ!

「な……………アンタ、何をする!」

「すまない。お前を試したかったただけだ。」

そして、結果は壱百点中捌拾伍。といったところだ。問題なく合格点だ。」

そう言った奴の恰好は、肩から先の服がなく、鎖を体に巻いている。蝙蝠や蝶々と同じ格好だ。

つまり、頭領の1人ということだ

「合格?…ということは、僕はここで学んでもいいのか?

それから、アンタ誰だ? すまないが、僕は名乗らない奴とは、関係を作らない主義でね。」

「おお、自己紹介が遅れたな。我は真庭鳳凰。一応頭領たちをとりまとまらせてもらっている。」

修行、という点では他の頭領は知らないが、我は許そう。存分に学びとってゆくがよい。」

「ありがとうございます。ところで、他の頭領方はどこいらっしゃるのですか？」

「奥に全員がそろっている。我についてきてくれ。」

そう言われたから、大人しく後を追うように歩いているが、この人からは何か変なものを感じる。
なんだか…借り物のような錯覚に陥る。

式重人格のようなものかもしれないな……つと。着いたようだ

「では、入るぞ。」

「はい。」 ガラガラ…

「鳳凰さんよおそいつが蝙蝠が連れてきたやつか？なんだ、まだちいせえガキじゃねえか。」

「まだガキではあるが、素晴らしい才能を持っているぞ。そういつてやるな。人鳥爺」

入ってすぐに声をかけてきたのは初老に入ったくらいの老人。どうやら、真庭人鳥というらしい。

「挨拶をするといい。長い付き合いになるからな。」

「^{やすりしちは}鑢七葉といいます。」

「。むのたくしろよ。だ『鷺白のり喋さ逆』」

「私は、真庭鴛鴦。『巻き戻しの鴛鴦』よ。鳳凰様が認めたようだから認めてあげる」

「この二人に我、『神の鳳凰』を合わせて鳥組だ」

「よかったな、七葉。生きていられて。知ってるとは思うが『無重の蝶々』だ。」

「この方が七葉さんですか？ かわいい盛りじゃないですか。『棘棘の蜜蜂』です。」

「前の2人のリーダーをやっている『首狩りの蠅螂』だ。虫組だ」

「俺は真庭人鳥。『超速の人鳥』と呼ばれている。」

「いいですねいいですねいいですね。私は『鎖縛の喰鯨』です。」

「魚組のリーダーの真庭海亀。『長寿の海亀』だ」

「死んだかと思ってヒヤヒヤしたぜ。『冥土の蝙蝠』な。」

「あなたが七葉ちゃん？ 私は真庭狂犬ちゃんよん。『伝染の狂犬』よ。よろしくねん」

「蝙蝠のお気に入りに入って聞いてたから楽しみにしてたが、こりゃあ、ダイヤの原石どころじゃねえな。」

俺は、『読み調べの川獺』だよろしくな。あ、ちなみに獣組な。」

「よろしくおねがいます。」

僕は、それぞれの道に置いて、確実に最強である人たちとの縁ができた

6の巻（後書き）

数字は一応昔のやつでいきます

1 〓 壱

2 〓 弍

3 〓 参

4 〓 肆

5 〓 伍

6 〓 陸

7 〓 質

8 〓 捌

9 〓 玖

1 〓 拾

です

7の巻

「よし、皆自己紹介が終わったようだな？」

では、我と狂犬とで七葉の仮住まいの案内をしようと思うの「まっ
てくれ。」……人鳥か」

さっきまでののはっちゃけた雰囲気：ではなく、真剣な表情をした人
鳥が口を開く

「鳳凰：里が貧しくて依頼を少しでも多くこなさなければならぬ
時期に悪いんだが、
七葉に教えるために頭領を参人ほど使ってもいいか？」

『!？』

その場にいた全員：いや、正しくは蝙蝠と鳳凰を除いた全員が吃驚
する

だが、その中で一番驚いていたのは七葉自身だった

「何を言ってるんですか人鳥さん！」

確かに、12頭領の4分の1の人たちに教えてもらえるのは確かに
うれしいですけど…

迷惑が掛かっちゃうじゃないですか！俺は技を見せてもらうだけで、
後は自主鍛錬でいいですから！」

「はぁ！？お前、自分よりもはるかに強い奴が、教えてやるって言
ってたんだ。

だから言わずに使えよ。その環境を。もったいねえだろうが。」

「!?!?!.....わかりました。では、よろしくお願いします。」

「わかればいいんだよ。で、鳳凰？いいのか？」

鳳凰は一瞬悩み、そして

「わかった。参人だな。それ以上はつけられん。

それと、誰が教えるかはお前が決める。人鳥。」

「ありがとな。

ああ、教える人員はもう決定してるから。俺と蝙蝠と、後は、蝶々だ」

「わかったが、なぜそのメンバーを選んだんだ？」

「蝙蝠と蝶々は仲よさそうだったから。

俺は.....気に入ったからだ!!」

人鳥は、真剣な顔で、どうでもいいことを口にした!

「えっ.....ああそうなんですか。そうですか。はい、わかりました」

「.....分かった。では、それでいこう.....」

七葉たちに壮絶なダメージ!!

七葉は状態異常“茫然”を負ってしまった!

鳳凰は状態異常“諦め”を負ってしまった!

と、まあそんな戯言は置いといて……

「七葉の目が若いころの俺に似てたからな。

ひよっとすると、ちゃんと削ればものすごい作品ができるかもしれないからねえからな。

俺もその過程に携わってみてえのよ。

……まっ、言ってみりゃあ“目”に惹かれたってことだ。」

ちゃんとした説明を聞いて皆さん納得。（↑ヲイ

「ふむ…我が里でも実力は抜きんでているお前が言うには……本当だろうな。

と、今日の集まりはこれくらいにしておいて皆解散だ。
それから、七葉は我と狂犬についてくるといい。」

「「「「「「「了解」」」」」」」

たった一言だけ残して鳳凰と狂犬を除いた12頭領は消えた。
おそらくだが、屋根裏にでも一氣に跳んだんだろう。

「鳳凰さんに案内をしてもらえるのはわかるのですが、なぜに狂犬さんまで？ 一人でも…」

「それはだな……「私の家に一緒に住むことになったからよん♪七葉ちゃん☆」……という訳だ。」

『その時の狂犬さんの背面には、何か黒いモヤモヤしたものが蠢いていました ガクブル…』

と、後で七葉は漏らしている

「実は七葉が来る前に誰の家に泊めるかを頭領の間で相談してな…その時もこの様子の狂犬を見た全員が『狂犬さん！おねがいします！！』と、懇願していた。」

「（嘘……………これ、俺の人生終わったんじゃない？）」

「それじゃあ行こうか♪七葉ちゃん★」

ズルズルズル…………

「え！？ちょー！！！？待って！！！？？鳳凰さーん！タス「すまん。我では力不足だったようだ」

あなたは何のためにここに来たのですかー！！（泣）」

「七葉ちゃんはかわいいねえ。

くフフ、男なのが残念だわ。女なら速攻で乗り移ってたのに。まあ、男は男で……………＞ボソツ」

「（ヒウ！僕に虫の知らせが…………タスケテ！お姉ちゃん！！）」

「ハッ！！七葉の悲鳴が聞こえたような…………大丈夫か。七葉だし。」

助けを求めた先の人はずいとうだが心配はしないようだ。鬼である。

「早く家に行こうか。七葉ちゃん★「いやあああ」フフン♪」

Ⅱ狂犬のお宅Ⅱ

「着いたよ。ここが今日から僕と君との愛の巣になるんだよ♪」

「やめてえええ！………っていうか、俺と狂犬さんって今日が初対面ですよね。」

「なんでこんなに強引に連れてきたりするんですか！」

七葉が問い詰めるも、いかにも『いいたいです』みたいな顔をするので、

「やっぱいいです。」

説明はいりません。案内をするのがめんど…「それはねえ…私が七葉ちゃんに“一目惚れ”したからよん♪あなたを紹介するために蝙蝠が送ってきた写し絵を見たときに『可愛い！！』ってね。だから…」

「（まずっ！）いっ…いや！拒否します！！」

「愛玩動物になりなさい♪」

ピョン

バツ

「いやああああ!!」

真庭の里には子供の叫び声が何時間も響き渡ったという

「七葉、ドンマイ。」

「七葉、強く生きろ。」

鬼がいた。どうやら、七葉の知り合いには、ろくな奴がいなようである。まる

僕は、頭領の1人に目をつけられ……いやああ!! 狂犬さん! こっちに來ないでください!!

7の巻（後書き）

狂犬、変態化ルート確定！

もとからこれはしたかったんです。

これから七葉はどんどん貞操の危機に……まあいっか♪

次は楽しい楽しい修行風景です

どうぞ、ご閲覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4230x/>

刀語 ～万能者～

2011年11月6日05時25分発行